

日本科学哲学会 第 48 回大会

2015 年 11 月 21 日（土）9:45-12:00

ワークショップ 心の哲学と美学の接続点

オーガナイザ・提題者：源河 亨（慶應義塾大学）

提題者：清塚 邦彦（山形大学）

提題者：森 功次（東京大学／山形大学）

本ワークショップの目的は、心の哲学と美学の接続点を明らかにし、それによって両者を横断する研究の足がかりを構築することである。

日常生活は美的なものにあふれている。芸術作品や雄大な景観を鑑賞する場合だけでなく、コップやボールペンといった日用品を選ぶ場合にも「これは見た目がいい」といった美的な経験・判断が介在する。美的経験が経験の一種である限り、それは心の哲学の検討事項になりうるし、日常生活にあふれているなら心の哲学はそれを無視できないだろう。

一方で、心の哲学には課題がある。心の哲学では、知覚、情動、信念、想像、意識といったさまざまな心的状態・経験が検討されてきたが、一見したところ、美的経験はそのうちのどれか一つに還元されるものではないように思われる。直観的に言えば、「これはかっこいい／ダサイ」と感じるのと、「これはこういう色・形をしている」と単に認識することの間にはギャップがあるのだ。そうすると、心の哲学が美的経験を扱うためには、「美的なものとは何か」を探求してきた美学研究を参照しなければならないだろう。

他方で、心の哲学は美学研究に貢献する可能性がある。美的経験は前述の心的状態のどれか一つに還元されるものではないと述べたが、美的経験にそれらに関わることは否定できない。そして、そうした心的状態についての心の哲学の分析は、美的経験の本性を解明するうえで不可欠となるだろう。また、「芸術作品」概念の一部に「美的経験をもたらすもの」ということが含まれるなら、心の哲学は、芸術作品の存在論にも貢献しうるだろう。

実際に、両分野を横断する研究は徐々に増えつつあり、こうした動向は今後さらに加速していくと予測される。両者の接続点はいくつもあるだろうが、本ワークショップではその具体例をいくつか提示し、今後の研究促進の足がかりとなることを目指す。取り上げられる論点は、美的判断と評価的经验（源河）、画像の知覚経験の内容（清塚）、美的証言の認識論的問題（森）である。